

論 文

ビジネスコミュニケーションソフトウェアを 使用した英語リメディアルコース

平 尾 日出夫

Abstract

With certain amount of credits compulsory in English, remedial courses for students who failed in regular classes are becoming more and more of the burden for the educational providers. Our project to cope with this problem using computer software for business communication and its results will be reported here.

I. はじめに

18歳人口の激減とともに大学全入時代が現実のものとなりつつある。このような状況の下、必修として設定されている言語、特に英語の単位を充足できない学生に対する単位回復科目（リメディアルコース）の設定が大学にとって大きな問題となってきた。志願者が募集人員をはるかに上回っていたこれまでとは異なり、入学時に一定の学力が必ずしも充足されていない学生も数多く入学するようになってきている。このため、通常の英語の語学の授業で単位を取得できない学生が飛躍的に増える結果となっている。こういった学生に対して、最低限の学力を保証する良質な教育内容を提供すると同時に、本来であれば、より少人数にしてより行き届いた教育を提供すべきであるところを、通常の語学の収容人員よりは多くの学生を一度に収容するという、相反する課題に取り組まなければならない事態に至っている。例えば、収容人員の上限を設定しない2単位の講義科目を単位回復科目として開講し、通常の語学の数倍の人数の学生に対して演習科目で認定される倍の2単位を一度に認定してしまうような取り組みもみられるが、言語科目の本来の設置趣旨からは反しているといえよう。

本来こういったコースでは、学生がこのようなコースをとるに至った経緯を観察し（Kyota (2009)、吉田 (2011)、清田 (2010)、鈴木 (2011))、学生に自信をつけさせ（大澤 (2011))、学習への動機付けを行うことが重要であるとし、いくつかの提案がなされるに至っている（吉田 (2011)、城一 (2011)、白倉 (2011)、清田 (2011))。また、こういった学習に対するコンピュータによるeラーニングの有効性なども主張されている（田原 (2011))。

本学では、早くから個別学習を可能にするコンピュータを利用したこの種のコース学習に対

する可能性に注目し、市販のビジネスコミュニケーションソフトウェアを利用した単位回復科目を企画・立案し、2008年度より英語音声演習1、2として開講してきた。コンピュータのソフトウェアを利用することにより、様々なレベルの学生が混在する単位回復科目の履修者の個別のレベルにある程度対応しながら、学生個人に応じた学習を可能にしようとしている。また、同時に授業の中で出席者全員で行うクラスワークを取り入れることにより、クラス全体で目標とする学習内容の習熟がある程度保証されることを目指している。実際には、ウィンドーズに対応したビジネスコミュニケーションソフトである QuickEnglish ビジネス英会話編1、2を利用し、通常の語学の定員である35名より5名多い40人を履修定員として開講している。

以下では、2011年度前期でのこの科目の実施内容及び、その授業の結果と前期最後の授業で行ったアンケートの回答内容を報告するものである。

Ⅱ. 授業の進め方

授業の開始に、直接担当教員より、授業で使うCD-ROMとテストの記録用紙が手渡される。次に、ソフトウェアを起動しオープニング画面(図1)を画面上に表示する。

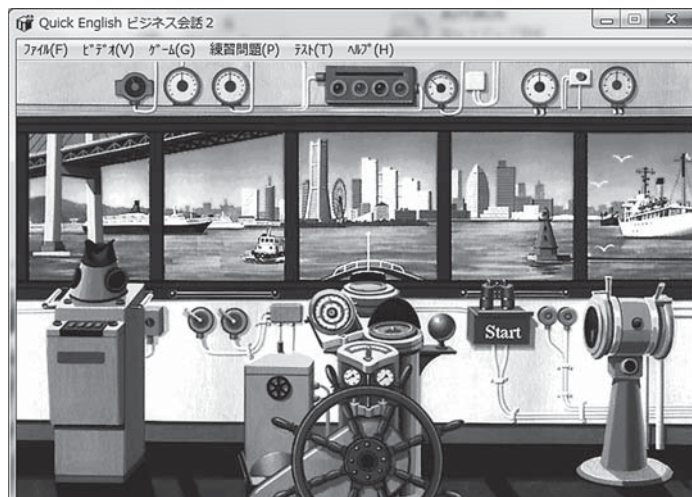


図1：オープニング画面

ここで Start のアイコン部分をクリックし単元選択画面(図2)を表示する。

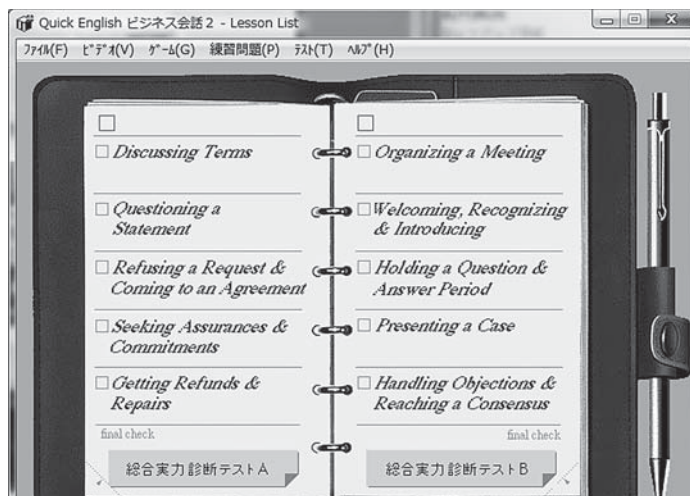


図 2：単元選択画面

単元を選択すると、最初にその単元の課題となる会話が再生される（図 3）。



図 3：課題会話の提示

ここでは、学生は約 5 分間ほど繰り返し再生をし、聞き取る努力をするよう指示される。授業開始から 10 分ほど経過したところで、学生はセリフの画面（図 4）に進めるよう指示される。

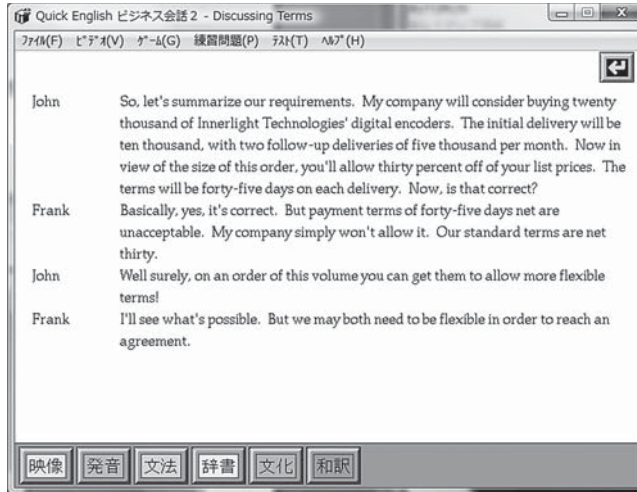


図 4：セリフの画面

ここでは、画面下部に設定されている発音、文法、辞書、文化、和訳に登録されている情報を各自で確認しながら、セリフの内容を確認していくことが求められる(約5分間)。その後、いったん手を止め、クラス全体で教員の指示で読み合わせなどを行いながらセリフの内容を確認していく(約10分間)。次に、単元選択画面にいったん戻りもう一度当該単元を選択し、セリフなしで再度ビデオを再生しながらセリフどおりに聞き取れるようになっているかを確認していく。この時の再生は5回程度続けて行う。ここまでで、授業開始から約30分の経過となる。次に、セリフの画面に戻り、画面上部に設定されている練習問題を各個人で行っていく。練習問題には、文法、辞書、文化の3セクションがあり、それぞれに Easy と Hard があり、各練習問題のセッションは10問である(図5)。

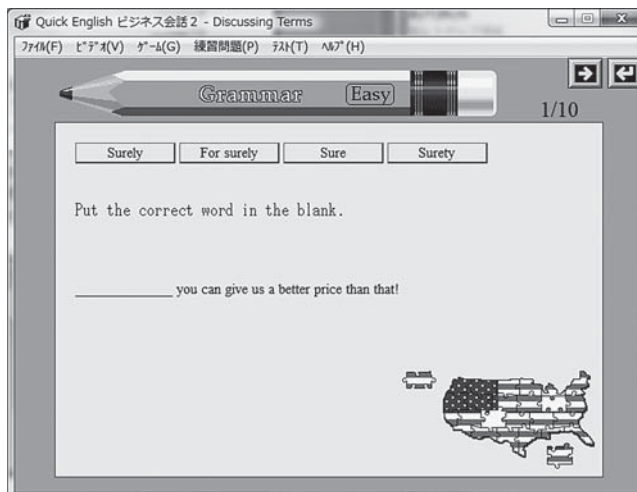


図 5：練習問題

練習問題は、出題形式が様々あるが、マスターファイルからランダムに10問が選ばれ、隣同士の学生が同じ問題にならないよう配慮されている。この練習問題は、約15分程度行う。

次に画面上部に設定されているテスト（図6）を行う。テストにはEasyとHardがあるが、学生はHardの方を行う。テストは4択の問題10問で、答を選択すると次の問題にすぐに移行する。また、全体で制限時間が設定されており、時間が来るとその時点でテスト終了となり、残っている問題は不正解として取り扱われる。時間の経過は、画面左下の砂時計によって表示される。10問回答が終わると、正解率が計算され、画面に成績が表示される（図7）。ここまで進んだ学生は、別途学生に授業開始時に配布されている記録用紙に成績を転記し、残りの時間で画面右上部に設定されているReviewボタンをクリックし、テストの結果の確認を行うよう指示されている。

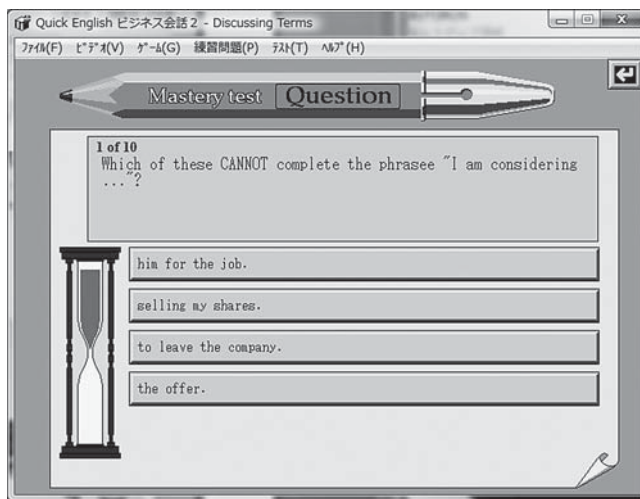


図6：テスト

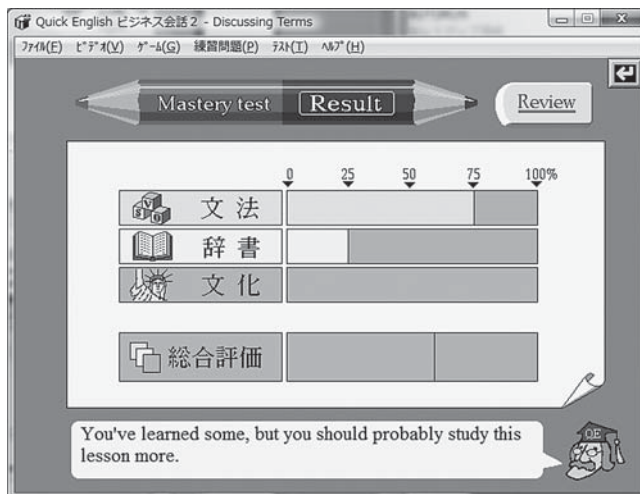


図7：成績表示

ここまでの経過時間は約 50 分である。

次に学生は、セリフの画面に戻って、画面下部の一番左側に設定されている映像（図 8）ボタンを使用して、セリフを見ることができ的状态でビデオを再生しながら音読してセリフを覚えるよう指示される（約 10 分）。また、この間に記録用紙が回収される。

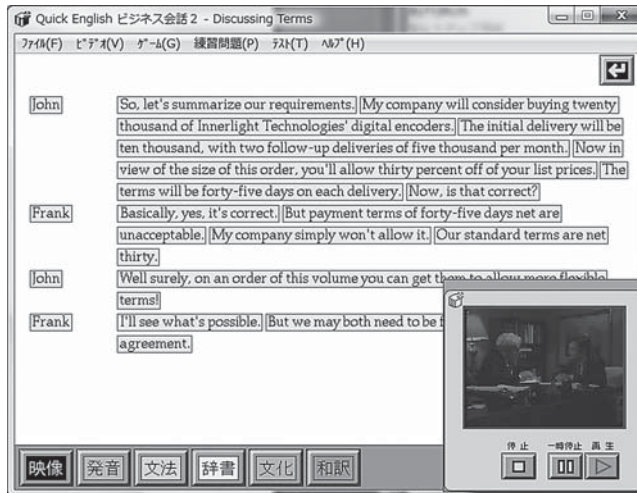


図 8：映像画面

この画面では、ある特定のセリフだけを繰り返し再生することも、再生のスピードをゆっくりとすることもできる。

次に、コンピュータでの練習を終了し、実際に 2 人 1 組になってペアプラクティスを行う（約 15 分）。この時、最初の 7 分間程度はセリフが画面上に表示されているが、そのあとは教員の操作により、セリフがすべて消されたり、セリフの後半 2/3 程度がマスクされたり、全セリフの表示に戻されたりが交互に行われる。

ペアプラクティス終了後、4、5 組程度のペアを指定し、教室の前に呼び出し、実際の場面をアクタアウトしてもらう。この時のパフォーマンスは、評価され、1 セメスターに 1 人 2 回程度行ってもらう。

これで授業終了となり、直接 CD-ROM を教員に返却して退室となる。

Ⅲ. 授業の結果

2011 年度前期開講の単位回復科目の英語音声演習 1 は 40 人定員で 2 クラス開講され、全部で 69 人が登録した。このうち合格者は 58 名で、合格率は、84% である。不合格者 11 名のうち 5 名が 1 度も授業に出席しなかった学生である。

表 1：2011 年前期の合否状況

登録者数	合格者数	不合格者数	カラ登録者数	合格率 (%)
69	58	11	5	84.06

合格者の評価点の最大値は 84 点、最小値は 60 点、平均は 65 点、標準偏差は 6.75 点であった。

表 2：合格者の得点状況

平均点	最大値	最小値	標準偏差
64.52	84	60	6.75

得点の分布状況は、圧倒的に 60 点に偏った分布となっている。

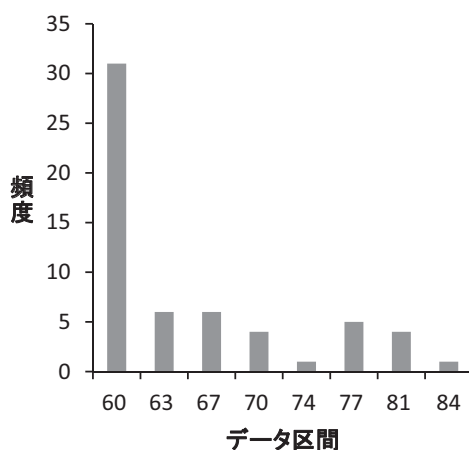


図 9：得点のヒストグラム

IV. アンケート

授業最終日の 7 月 20 日に授業に関するアンケートを行った。回答者数は、2 クラスで 54 名であった。以下に設問のセクションごとに結果を報告する。

(1) 設問 1：授業の満足度

「この授業の全体としての満足度はどれぐらいですか。」という設問に対して、まったく不満、不満、どちらでもない、満足、大変満足から選択するよう指示されている。結果は以下のとおりである。

表 3：授業の満足度

まったく不満	不満	どちらでもない	満足	大変満足
0	3	11	31	4

回答者の約 65%にあたる 35 名が満足もしくは大変満足と回答している。反対に不満は 3 名、まったく不満とした学生はいない。まったく不満を -2、不満を -1、どちらでもないを 0、満足を 1、大変満足を 2 として平均を計算すると 0.67 となる。

(2) 設問 2～6：学力の向上について

このセクションの設問では、英語力の様々な側面について、この授業で進歩したと学生本人が思うかどうかについてたずねた。設問 2 は全体としての英語力、設問 3 は英語でのコミュニケーション力、設問 4 は話す力、設問 5 は聞く力、設問 6 は意思伝達の特定の場面での表現力についてたずねた。選択肢は、変わらない (0)、少し進歩した (1)、進歩した (2)、大変進歩した (3) で、選択肢の後に示された値をそれぞれの選択肢に付与した場合の平均値も合わせて示す。

表 4：学力の進歩

	変わらない	少し進歩	進歩した	大変進歩	平均値
設問 2	11	30	9	4	1.11
設問 3	13	31	6	4	1.02
設問 4	19	24	8	4	0.96
設問 5	7	25	17	5	1.37
設問 6	17	23	10	4	1.02

平均値は、話す力を除けば 1 以上となっている。総合的な英語力の進歩に対する平均値である 1.11 を上回っているのは聞く力の 1.37 である。

(3) 設問 7：授業の難易度

この授業の難易度を設問 1 の満足度と同じように 5 ポイントの選択肢（大変易しい、易しい、ちょうど良い、難しい、大変難しい）で調査した。

表 5：授業の難易度

大変易しい	易しい	ちょうど良い	難しい	大変難しい
4	6	25	15	4

設問 1 と同じ値で計算した場合の平均値は、0.17 であった。受講生の学力と授業の難易度のミスマッチが最も大きい両端の選択肢を選んだ学生が、それぞれ 4 名ずついる。

(4) 設問 8、9：この授業の長所、短所

複数回答可で、この授業の良いところ、悪いところを選択してもらった。実際には、この二つの設問は対になっており、この授業の特徴を学生が短所と感じているか、長所と感じている

かを明らかにする意味もあった。

表6：授業の良い点、悪い点

設問8（良い点）		設問9（悪い点）	
自分のペースでの学習	34	学生任せの授業	4
コミュニケーション演習中心	16	文章を読まない	1
視聴覚教材の利用	30	白板を使わない	2
ゲーム感覚の授業	32	講義が無い	9
コンピュータの使用	11	コンピュータの使用	2
ペアプラクティス	14	ペアプラクティス	2
アクトアウト	8	アクトアウト	15
担当教員	20	担当教員	1

この授業の良いところとしては、約63%にあたる34名が自分のペースで学習できることをあげている。これに続くのが、ゲーム感覚の授業（32名）、視聴覚教材の使用（30名）である。悪い点を指摘した学生は、良い点を指摘した学生に比べて圧倒的に少ないが、アクトアウトをすることを指摘した学生が15名と最も多く、講義がされないことを指摘した学生が9名でこれに続いている。

その他としては、悪い点として、「時間割の設定時間が遅い」、「ペアの学力差が大きく練習にならない」、「教材が悪い」、「簡単すぎる」との記述が各1名の学生よりあった。

(5) 設問10：この授業を受けるにいたった主因

この設問では、この授業を受講するにいたった主な原因を一つ選ぶよう指示していたが、かなりの学生が複数の項目を選択し、受講の主因を特定する設問とはならなかった。

表7：受講に至る主因

授業に興味が持たなくて出席しなかった。	18
授業が難しすぎた。	5
授業が易しすぎた。	0
授業が朝早すぎた。	24
授業の宿題が多すぎた。	1
クラブ・サークル活動が忙しすぎた。	3
アルバイトが忙しすぎた。	5
遊びすぎた。	5
就職活動が忙しすぎた。	0
担当教員が気に入らなかった。	9

最も多いのは、基幹時間割の設定との兼ね合いもあるが、朝早すぎるというものであった(24名)。その次に多いのが、授業に興味を持ってない(18名)、担当教員が気に入らない(9名)であった。

その他の単独の記述としては、「APUに6ヶ月行っていた」、「受講登録を忘れた」、「病気がちだった」、「テストの日に朝寝坊した」、「気がついたら落ちていた」があった。

V. 考察

この授業の合格率が85%近いということは、この種の授業としては驚異的に高い合格率である。しかも評価が60点付近に偏っていることは事実であるが、80点以上の評価を得る学生が数名存在することも事実であり、ある程度実質的な英語学習プロセスが行われていることが推測できる。このことは、アンケートの設問2～6のすべての項目で、ほぼ平均1ポイント(少し進歩した)を記録していることから支持されよう。また、約65%の学生がアンケートでこの授業に満足していると回答しており、授業としては相対的にかなり成功していると言える。

設問2～6では、全体的な英語力の進歩で平均1.11ポイントであるのに対し、これを上回っているのが1.37ポイントの聞く力の進歩であった。このことは、この授業が、学生の実感としてはリスニングの演習として最も効果が高かったと感じられていることを示していると言えるだろう。

設問7の難易度では、平均が0.17ポイントで、ほぼ難易度が適正であったことを裏付けている。ただし、易しすぎる、難しすぎるという両極端の回答が4名ずつあり、このような授業での学力差の存在による授業運営の難しさを示唆している。このことは、設問9の、この授業の短所に対する「学力差でペアプラクティスがうまくいかない」や「簡単すぎる」という学生のコメントにも反映されている。しかし、そういった中でも、±2の範囲の中で平均0.67ポイントの満足度を記録していることは評価できよう。このことは、次にみる「この学習の長所」で明らかになるように、学生自身のペースに合わせた個別学習がコンピュータによって可能になっていることが大きく貢献していると推測される。

この授業の長所としては、自分のペースで学習できることが最も多いが、コンピュータを利用したマルチメディア型の学習を評価する項目がこれに続いている。これらは、すべてマルチメディア型のビジネスコミュニケーションのソフトウェアを利用し、コンピュータ教室で授業をしていることによって可能になったものである。また、コミュニケーション演習中心の授業を評価する学生が15名、ペアプラクティスを評価する学生が14名おり、実際の言語運用を中心としたコミュニケーション演習が相対的に学生に評価されていることを示している。

設問9の短所の指摘は、おおむね対応する長所の指摘に対して極めて少ないが、アウトだけが、長所とする学生が8名に対し短所とする学生が15名と逆転している。このことは人前で目立つことを避けようとする日本人学生の気質を反映していると考えられる。また、ゲーム形式の授業を長所とする学生に対して3分の1以下ではあるが、9名が講義の無い授業を短所としている。このことは、学生の良い授業に対する考え方が、いまだにある種の固定観念にとら

われていることを表していると考えられることもできる。

設問 10 のこの授業を受けることになった主な原因では、朝早すぎる授業を選択したが 24 名で圧倒的に多い。これは、時間割設定の問題というよりは、学生自身の学習に対する取り組みの問題といえるだろう。これに続く、授業に興味を持たない（18 名）や教員が気に入らなかった（9 名）は、開講されている正科の語学授業が、学生のニーズに必ずしも対応していないことを示しているかもしれない。このことは、高い学力を持ちながらも、単位回復科目を履修することになった学生がいないわけではないという事実にも反映されていると思われる。実際、受講者のうち数名が、家庭での主な意思疎通言語が英語である帰国生徒やすでに来年度からの大学院への進学が決まっている 4 回生であり、授業担当者としてもなぜこの授業を履修しているのかを不思議に思わざるを得なかった。このことも、難易度の設問の所で議論したような、受講者間の学力的不均質を生む原因のひとつとなっていると考えられる。

VI. 結語

授業の結果とアンケート結果を見る限り、この授業は単位回復科目としてかなり成功しているといえる。この授業を開始するに当たっては、諸般の事情から 40 人分のソフトウェアしか用意できなかった。本年度の単位回復科目見直しの議論の中で、収容人員が 40 名というのはコストパフォーマンス的に講座維持をすることが難しいと判断され、来年度からはこの授業は廃止されることになった。授業内容に優れたものが認められるにもかかわらず、主に経済的効率の観点からこの授業が廃止されるに至ったことは、この講座を当初から企画立案し、実際に授業運営してきた者として残念と言うほかはない。

参考文献

- Kiyota (2009) "Motivation of Remedial EFL Learners (A Case Study of Japanese College EFL Learners) ." 『リメディアル教育研究』 vol. 4, no. 2, pp. 41-47.
- 白倉美里 (2011) 「学生をやる気にさせる動機付けの工夫」『英語教育』 vol. 59, no. 12, pp. 25-27.
- 大澤真也 (2011) 「学生に自身をつけさせる英語教育プログラム」『英語教育』 vol. 59, no. 12, pp. 22-24.
- 清田洋一 (2010) 「リメディアル教育における自尊感情と英語学習」『リメディアル教育研究』 vol. 5, no. 1, pp. 37-43.
- . (2011) 「否定的な学習意識を協働学習で変える：自尊感情の向上を目指して」『英語教育』 vol. 59, no. 12, pp. 31-33.
- 城一道子 (2011) 「英語が苦手な大学生のための英語教育奮闘記：動機付けること，寄り添うこと」『英語教育』 vol. 59, no. 12, pp. 20-21.
- 鈴木久実 (2011) 「苦手意識を持った学習者を「救う」ことの意味」『英語教育』 vol. 59, no. 12, pp. 36-37.
- 田原博幸 (2011) 「自動繰り返し学習機能付き e ラーニングの有効性」『英語教育』 vol. 59, no. 12, pp. 28-30.
- 平尾日出夫 (1989) 「コンピュータを使った英文読解トレーニング」『語法研究と英語教育』 Vol. 11, pp. 91-93.
- . (1990) 「英文読解 CAI における単語の表示方法とその教育的効果」『CAI 学会誌』 Vol. 7, pp. 22-26.
- . (1992) 「英文読解 CAI における課題文の 2 種類の画面表示方法と学習後のコースウェアに対する学生の評価」『CAI 学会誌』 Vol. 9, pp. 71-76.
- . (1995) 「英語 CAI による英文読解力伸長効果について」『立命館言語文化研究』 第 7 巻 2 号, pp. 87-105.
- . (1996) 「英文読解コースウェアによる学習の効果について—1995 年度の結果—」『立命館言語文化研究』 第 8 巻 2 号, pp. 91-102.
- 平尾日出夫、他 (2008) 「コンピュータ教室を利用した自学中心の英語補習授業」『大学英語教育学会関西支部秋季大会発表要綱』.
- 吉田新一郎 (2011) 「「学ぶ」を知り、「教える」に生かす」『英語教育』 vol. 59, no. 12, pp. 13-15.

付録：最終授業アンケート

英語音声演習アンケート

1. この授業の全体としての満足度はどれぐらいですか。
まったく不満 不満 どちらでもない 満足 大変満足
2. この授業であなたの全体としての英語力は進歩したと思いますか。
変わらない 少し進歩した 進歩した 大変進歩した
3. この授業であなたの英語コミュニケーション能力は進歩したと思いますか。
変わらない 少し進歩した 進歩した 大変進歩した
4. この授業であなたの英語を話す力は進歩したと思いますか。
変わらない 少し進歩した 進歩した 大変進歩した
5. この授業であなたの英語を聞く力は進歩したと思いますか。
変わらない 少し進歩した 進歩した 大変進歩した
6. この授業であなたの場面場面での英語の表現力は進歩したと思いますか。
変わらない 少し進歩した 進歩した 大変進歩した
7. この授業はあなたの英語力に対して難易度はどうでしたか。
大変易しい 易しい ちょうど良い 難しい 大変難しい
8. この授業の良かった点は何ですか(複数回答可)。
ほとんどの学習を自分のペースでやることができる。
コミュニケーション演習を中心にしている。
視聴覚教材(ビデオ)が取り入れられている。
ゲーム感覚で授業を受けられる。
コンピュータを使うことができる。
ペアプラクティスで実地の演習をすることができる。
みんなの前でアクトアウトができる。
担当教員がよい。
その他

↓

[

]

9. この授業の悪かった点は何ですか(複数回答可)。

- ほとんど学生任せの授業。
- 文章をほとんど読まない。
- ホワイトボードを使わない。
- 教員による講義がない。
- コンピュータを操作しなければならない。
- ペアブракティスをしなければならない。
- みんなの前でアクトアウトがしなければならない。
- 担当教員が悪い。
- その他

↓

[]

10. あなたがこの授業を受けることになった主な原因は何ですか。一つ選んでください。

- 授業に興味を持てなくて出席しなかった。
- 授業が難しすぎた。
- 授業が易しすぎた。
- 授業が朝早すぎた。
- 授業の宿題が多すぎた。
- クラブ・サークル活動が忙しすぎた。
- アルバイトが忙しすぎた。
- 遊びすぎた。
- 就職活動が忙しすぎた。
- 担当教員が気に入らなかった。
- その他

↓

[]